
鬼殺し

胡蝶楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼殺し

【Nコード】

N83840

【作者名】

胡蝶楓

【あらすじ】

ある日の事、万事屋に来ていた真選組の山崎、土方、沖田と万事屋の三人の前に斗と卿きょうと名乗る天人がたくさんの手下を連れてやって来た。

彼らの目的は？！

銀時の運命は！？

「この小説には肩こり、頭痛を治す効果が・・・」

「ねええわあああ！！！！」

「ノリが悪いアルなあ。だから新八なんだよ！なんだよ？八つて
！」

「そんなの知るわけねえだろ！」

『すいません、喧嘩しないでもらえませんか？出番・・・無くします
よ？』

「・・・えつと『鬼殺し』を」

『宜しくおねがいします！』

始動

ある村でのこと。

そこでは、寄合が行われていた。

ある男が喋りだした。

「皆！聞いてくれ！俺達の村を不幸に陥れた『屍を喰らう鬼』は、かぶき町でまだ生きている！」

男の一言で、皆が

「だからか！この村が不作なもの！」

「江戸に行ったやつらが音信不通なもの！奴の仕業なんだ！」

そして、ある一人が、

「奴を消せばいい・・・殺せばいいんだ！」

その一言から皆が叫び始めた

「殺せ！」

「屍を喰らう鬼を殺せ！」

「奴には幸せも入らない！」

「奴は生きている価値もないんだ!」

その時、そこに黒いマントに編笠のかぶった男がやって来た。

それに、男が

「お主何者だ!」

その言葉に、黒いマントに編笠のかぶった男が

「寄合中に失礼。私は斗卿^{ときやう}。お前らに手を貸してやる」

その言葉に男が

「それは本当か!？」

「ああ。」

斗卿は薄く笑いながら言った。

そのことばに男が

「俺は、清葉亮^{せいばりやう}堵^とだ。

屍を喰らう鬼を限界まで苦しめてから殺してきてくれ」

「御意」

そういうと、斗卿は去っていった。

夢

俺は最初はわからなかった。

「化け物」

「鬼」

「屍を喰らう鬼」
しかばね おに

それ以外に言われた事はなく。

俺が人間なのか、鬼なのか。

この先、何が起きるのか。

すべてが暗闇。

何にも見えない暗闇だった。

そんな、暗闇が心の中にも浸透していった。

明日、いやこの後何が起きるのか全く見えないのが怖かった。

孤独が怖かった。

それなのに、いつの間にか真っ赤に染めていた。

たくさんの人々で。

人が全く見向きもしない神社が、燃えていた

「やったぞ！」

「殺したぞ！」

「屍を喰らう鬼を殺したぞ！」

「これで村は幸福だ！」

「これで不幸はもう来ない！」

人々の歓喜の声はそこで止まってしまった。

ブシャアアア！

そう・・・

炎の中にいるはずの

銀髪に紅の目をした、「屍を喰らう鬼」が殺したから。

朝

バサッ！

「なんだ・・・夢か・・・」

さっきの風景が夢だと気づくのは一秒もかからなかった。

いつもの光景、静かな朝。

時間を見たら7時30分。

いつもだったら、もう少し寝ているが、あまり寝る気にならなかったから

俺は、いつもの着流しを着た後、朝食を作り始めた。

）。）。）。）。）。）。）。。

僕はいつものように、万事屋に向かった。

また、あの2人は寝ているんだろうな・・・

と思っ

ガラガラッ

「おはよーございまーす」

そこで、珍しく

「おおー新八か」

銀さんの声が聞えた。

僕は、驚いて、

「銀さん?!どんな風の吹き回しなんですか?!」

「ただ、早く起きたただけだ

神楽、起こして来い。

朝飯できたから。」

「あ、わかりました・・・」

僕は、神楽ちゃんを起こしに行った。

）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）

「暇だな」

「そうですね」

「そうアルな」

「仕事来ないな」

「そうですね」

「そうアルな」

三人は、いつも通りに仕事がなく暇だった。

その時だった、

ピンポン

「はいはい」

新八が出た、すると・・・

「あ、新八君。」

「山崎さん！あと土方さんと沖田さんも！
どうしたんですか？」

「おい、万事屋いるか？」

「居ますけど・・・？」

「じゃあ、上がらせてもらっわ」

悪

「……で？用って何だ？」

「おい、お前ら……」

土方が、言おうとしたとき、

リン

リン

リン

風鈴なんて無いのに、確かに風鈴の音が聞えた。

「おい、何で風鈴の音が聞えた？

この部屋に風鈴なんてねえぞ」

その時だった。

ピンポーン

「僕……見てきますね？」

しばらくしてから、新八の悲鳴が聞えた。

「うわぁぁぁ！……！！！」

新八は、走って戻ってきてこういった。

「玄関に・・・玄関に

天人がたくさんいるんです！

それも、武器を持った！」

彼らの顔は一気に変わった。

真選組の三人は真剣、銀時と新八は木刀、神楽は傘を構えた。

その時だった。

「私は斗ときょう卿。

ここに、屍を喰らう鬼、居ますよね。

そこに。渡してもらえませんか？」

天人が指差した方向には銀時がいた。

しかし、

「嫌アル！

何があつたのかはわからないけど

銀ちゃんは渡さないアル！」

神楽が、銀時の前に出た。

それに、新八が続き、

「そ、そうだ！

銀さんは絶対渡さない！」

「新八、神楽……」

それに、

「貴方達、屍を喰らう鬼をかばうのですか？
面白い。」

屍を喰らう鬼をかばうのならあなた達も殺します」

斗卿は真剣を取り出した。

それで悟ったのか、

土方、山崎、沖田は新八、神楽のように刀を構えながら、銀時の前にでながら、

土方はタバコを吸いながら

「借りをただ作りたくねえだけだ。」

沖田は唇をなめながら、

「旦那には借りがありやすからねい」

山崎は銀時のほうを向き、

「俺達の気持ちは一つです。何が合っても。」

彼らの言葉に銀時は

「お前ら……生きろよ。」

『ああ』

その時、

「死ぬ前のおしゃべりは終わったみたいだから始めるとしようか」

一息ついてから斗卿は叫んだ

「かかれえー！！！！」

その声と共に銀時をはじめとする6人は駆け出した。

悪（後書き）

次から、戦闘シーン入りますっ！
あゝ！

学校めんどくせえ！
いつそ休みてえ！！！！！

戦闘

ガキーン！

ガキーン！！！！

ザシュツ！！

6人は切り傷を受けながらも襲ってくる天人たちを斬っていった。

しかし、天人は減るところが増える一方だった。

その時だった。

「後ろ、がら空きですよ。」

「なっ・・・！？」

銀時の真後ろには斗卿が立っていた。

銀時が、後ろを向いた瞬間、他の天人が銀時の腹を蹴り、斗卿が薬の入った注射を銀時の首に刺した。

ブスッ

その痛みに、銀時は絶叫した。

「ぐあああああああ！！！！」

それに気づいた神楽が叫んだ

「銀ちゃん!!!!」

その言葉で、新八たちは、銀時の方を見ると、そこには、心臓部を抑えながら呻いている銀時が居た。

最初に行動を起こしたのは、神楽だった。

「お前、銀ちゃんに何をやったアルか?!」

「あなたには、全く関係ないでしょう?」

それに、新八が、

「関係無くない!銀さんは」

『僕/私の家族です(アル)!!』

その言葉に、斗卿は薄く笑い、

「コイツの過去を知ってもそんな事が言えるのか?」

その言葉に、銀時が

「やめてくれ・・・」

それをおもしろがるかのように、斗卿は言った

「屍を喰らう鬼には、家族なんて要らない。仲間なんて要らない。

さあ狂え！屍を喰らう鬼！いや・・・白夜叉！！！！！！！！！！」

ドクンッ！！！！

その様子を見た、新八は

「銀・・・さん？」

新八たちの前には、いつものような死んだ魚のような目をした銀時ではなく、異様な程の殺気を漂わせ、とても冷たい目をした銀時が、立っていた。

それに、神楽が、

「新八！逃げるアル！」

「え？！」

その時、銀時が、木刀を振り下げ、新八を狙った。

新八は、瞬間的に目を閉じた

（やられる！）

しかし、新八を狙った木刀が、全く落ちて来なかった。新八が目を開いたら、木刀は、新八の横に落ちていた。

それを見た、5人は、

「銀さん！まだ意識あるんですよね！戻ってください！」

「銀ちゃん！戻ってヨ！」

「旦那！戻ってくださいえ！早く戻って土方コノヤローをやりましょ
うぜ！」

「旦那！早く元に戻ってください！」

「早くもとに戻れ！万事屋！」

ザシュツ

『！？』

銀時は自分の腹を、落ちてた真剣で斬った。

「こうでもしねえと・・・意識がもたねえからな」

それを見ていた、斗卿は面白そうに言った

「フツ・・・今日は、ここまでにしておきましょう。
それではみなさんごきげんよう」

斗卿は、仲間を引き連れ帰ってしまった。

「おい！待て！」

土方が叫んだが、そこにはもういなかった。

新八達は、銀時にかよった。

屯所（前書き）

とっても遅くなってごめんなさいっ！

紫夜叉さん！コメントありがとうございます！

ここで、お礼を申し上げさせてもらいます！

それでは、どうぞっ！

屯所

「銀ちゃん！しっかりするネ！」

神楽は焦った声で、

「銀さん！しっかりしてください！」

新八も焦った声で、

「旦那あ！しっかりしてくださいえ！旦那あ！」

沖田は、いつものドSではなく、泣きそうな声で、

「旦那！万事屋の旦那！しっかりしてください！」

山崎も、新八、神楽と同じように焦っていた。

「新八・・・神楽・・・土方・・・沖田・・・山崎・・・ごめん・・・」

『銀さん／銀ちゃん／旦那／万事屋！！！！』

新八たちは、銀時に呼びかけた。
だが銀時は、何にも反応しなかった。

腹からは、大量の血が出ていた。
全く止まる様子も見せなかった。

それを見た、土方は

「これはヤバイぞ・・・総悟！山崎！屯所に運ぶぞ！
眼鏡とチャイナも着いて来い！」

「はい！」

「分かってるアル！」

「近藤さん！近藤さん！」

銀時を担いだ土方は柄にも無く叫んでいた。

「何だ？トシ・・・今からお妙さんの警護に行くところだったんだ
が。」

「行かんでいいわ！」

新八は、近藤につっこんだ。

「近藤さん・・・旦那が・・・旦那がやばいでさあ！」

いつものような、ドS顔ではなく、泣き顔の沖田を見た、近藤は少し驚き、

土方に担がれた、銀時を見て血相を変えた。

「山崎！救護班を呼べ！」

「はいい！」

銀時を担いだ土方と沖田はある部屋に入って行き、消えた。

その様子をもの悲しそうな顔で、神楽、新八は、見ていた

哀しみ

その時だった

「新八君、チャイナさんこっちに来てくれないか？」

近藤の言葉に、神楽と新八はうなずき、ついて来た。

「・・・まあ、そこらへんに座ってくれないか？」

『はい／分かったアル』

神楽と新八は畳の上に座った。

「・・・・・・お茶でも飲んで！」

元気の無い状態で、神楽と新八は少しお茶を飲んだ。

あたたかかった。

少ししてから、近藤が

「・・・大変だったみたいだな。・・・もしよければ何があったのか教えてくれないか？」

新八と神樂は、銀時のことを思い出したら泣いていた。

銀時を、護りきれなかったから。

銀時が、苦しんでいることに。

そんな、新八と神樂を見て、近藤が焦った。

「すまんすまん！落ち着いてから話してくれたらいいんだ！」

その時だった。

バタバタバタ……

スパアーン！

走ってやって来たのは、山崎だった

「局長！旦那の意識が戻りました！」

その言葉を聞いて新八と神樂は走って銀時の元へ向かった

支え

スパアーン！

「銀さん！／銀ちゃん！」

新八と神楽は銀時の名を叫ぶなり、抱きついた。

新八と神楽を見て、笑顔になりかけたが、腹の傷が治っていないためか、唸った。

「うつつ・・・」

新八と神楽はそれに気づいたのか銀時から一旦離れた。

すると、銀時が

「俺に打たれた薬は・・・ツラか・・・高杉のどちらかが・・・分かるはずだ。」

少し、間を空けて言った

「あと・・・また俺が覚醒したら

殺してくれ。

そうしないと・・・またお前らを・・・傷つけてしまう・・・」

その言葉に、新八、神楽、沖田、土方、山崎、近藤が目を見開いた。

「銀ちゃん・・・なんで・・・なんでそんな事言っネ・・・？
銀ちゃん殺すなんて私できないネ・・・」

神楽の悲しそうな声に、新八がのった

「神楽ちゃんの言うとおりです。」

銀さんを殺すなんて、何があっても出来ません」

そんな、神楽と新八に続き、土方が言った。

「てめえの魂^{ルール}守り通すんだったら、生きろ」

銀時は、少し微笑みながら

「そうだな・・・」

銀時の言葉に、そこにいた全員が、微笑んだ。

だがしかし、

まだ、「安心」という二文字は無い。

「不安」の方が多い。

いつ、銀時が覚醒するのか分からないから。

「・・・万事屋の旦那、腹の傷治っていないんで寝ていてください
ね？」

「わあかつてるよ」

銀時が、そういった後、土方たちは、銀時の居る部屋から出て行った。

悪夢（前書き）

皆さんケータイからこんにちは！

なぜケータイからかって？

今試験一週間前だからです！

それではどうぞっ！

悪夢

銀時は起きたら、誰も居ない暗闇の中で立っていた。

「此処は何処だ……？これは夢か……？」

銀時はきよろきよろしていた。

その時、前から斗卿が現れ、銀時は警戒しながら、言葉を発した。

「お前か！俺にこんなことをしたのは！」

その言葉に斗卿が、

「わたくし私あるお方に頼まれているのですよ。

『屍を喰らう鬼を限界まで苦しめてから殺せ』とね。まあ、もう一人にも頼まれていますよ。」

その言葉の内容を銀時が察したのか、怒りながら、

「てめえ……！あいつらを殺す気か……！」

それに斗卿が、妖しく笑ながら、

「私が殺しても楽しくないじゃないですか。

『屍を喰らう鬼。いや白夜叉』あなたが殺すのですよ。」

ドクンッ

銀時は、胸を押さえ、膝でたちながら苦しんでいた。

それを見ながら、斗卿は

「鬼には仲間なんかいない。」

そう言って、去って行き、銀時は倒れてしまった。

次、起きたときは、白夜叉として、仲間を殺さなければならない。

会話（前書き）

皆さんこんにちは！

作者です

今回もケータイからの投稿です
それではどうぞっ

会話

土方達は近藤の部屋に来ていた。

「万事屋に何があつたのか教えてくれないか？」

ゴリ…近藤が聞いた。

「今ゴリラって言いかけた！」

……スルーします

近藤の質問に新八が答えた。

「斗卿と名乗る天人が銀さんに薬を打たれたんです。」

新八の言葉に近藤が

「新八君。今、斗卿と言ったか？」

「言いましたけど…それがどうかしたのですか？」

新八が聞き返すと、

「ああ、斗卿は天道衆の副長だ。とても危険と言われている。あと、

春雨の黑夜叉とも関わっているらしい」

その言葉に神楽と新八が驚愕した。

「ゴリラ、今春雨って言ったアルか！」

神楽が聞き、近藤が

「言ったがそれがどうかしたのか？」

「多分神威も関わっているはずネ」

神楽は険しい顔をし、土方達は驚いていた。

「おい、チャイナ。神威って春雨の第七師団団長のか？」

土方が聞いた。
それに神楽が

「そうネ！あの馬鹿兄貴、私とパピーとマミー見捨てたネ！」
神威が神楽の兄と知り、真選組の4人はまたもや驚いていた。

そのときだった。

ドカン！！

大きな物音が銀時の部屋から聞こえ、6人は銀時の部屋に向かった。

判明（前書き）

皆さんにお知らせです

ヅラと高杉、銀さんは仲良し設定です

「ヅラじゃない！桂だ！」

……………それではどうぞっ！

判明

銀時の部屋に着いた土方達は呆然と立ち尽くしていた。

目の前には、銀時がとてつもない殺気をかもし出しながら冷たい目をし、銀時を抑えようとする隊士達を血まみれにしていた。

銀時は土方達の存在に気付き、剣先を土方達の方に向けていた。

新八は銀時の冷たい目と殺気で動けないでいた。
それは土方達もいっしょらしく、全く動けないでいた。

そんな中神楽が、

「銀ちゃん、やめるヨロシ！
また万事屋やるネ！」

新八は神楽に見習いながら、

「そうですよ銀さん！また三人で万事屋やりましょう！」

しかし、新八と神楽の言葉が無情にも銀時には届かず、銀時は木刀を神楽と新八に降り下ろした。

「新八君！チャイナさん危ない！」

山崎が叫んだその時、

ガキイン！

神楽と新八の前には桂と高杉が銀時を止めていた。

「桂さんと高杉さん……！！
なんで此処に?!」

「ククツ…懐かしい殺気がしたからなあ。なあヅラあ。」

高杉が桂に話をふった。

「ヅラじゃない！桂だ！
高杉！銀時を気絶させるぞ！」

二人はとてつもないコンビネーションでなんとか銀時を気絶させたのだった。

新八達は銀時の部屋で高杉と桂と向かいあっていた。

「桂と高杉、礼を言う。」

近藤の言葉に桂が

「俺達はただ銀時を止めただけだ。」

その時、全く出番のなかった山崎が……
「いや、あんたが俺の出番作ってくれなかったからじゃん！」

あ、そうだったね！
てへッ わすれてた

「忘れんなよ！」

……………さて元に戻しましょう。

「旦那に射たれている薬って何ですか？」

山崎の言葉に新八が続いた。

「銀さんが桂さんが高杉さんに聞けば分かるって言ってたんです」
新八の言葉に桂がうなずきながら、

「銀時に射たれている薬はRADだと俺は思う。」

それに土方が驚きながら

「RADって最凶の精神崩壊剤……………！！」

春雨

「RADって最凶の精神崩壊剤……！！」

土方の声が部屋に響き渡った。

それに、桂が

「そうだ。あの薬を飲んだら、自身の持っていた本来の力を蘇らせると共に、

精神を崩壊させ、死に至らせる。

銀時は、何とか抑えているが、このままじゃあ銀時は死に至る。」

桂の言葉を聞き、神楽が涙ぐみながら、

「そんな……なんでヨ……なんで銀ちゃんがそんな事になるネ……！」

新八は、そんな、神楽の様子を見ながら

「そうです！銀さんが死ぬなんて……僕嫌です……」

新八が泣き崩れた。それに、土方が

「そう泣くな、チャイナと眼鏡。あいつがそんな簡単に死ぬほどやわじゃねえのはお前らが一番知っているだろ。だからそう泣くな。」

そついうと、土方は桂と高杉の方に向き、薄く笑い、桂と高杉もそ

れに答えて、薄く笑った。

それに、神楽と新八が

「そうですよね。銀さんはそんな簡単に死にませんよね!」

「そうネ新八! 銀ちゃんが元に戻ったら酢昆布を奢ってもらっネ!」

その様子を真選組4人と高杉、桂は優しく見守っていた。

少ししてから、高杉が

「一つだけ、銀時を完全に救ってやる方法がある。」

その言葉に、新八が

「銀さんを・・・完全に助ける方法?」

「ああ、RADの解毒剤を銀時に与える。ただし

それは、春雨の副団長の金庫の中にある。」

それに、土方が

「それってやばいんじゃないか？どうやって解毒剤奪って来るんだ？」

それに桂が、

「それは、高杉に任せる。いいか、高杉。」

「ククツ・・・いいぜえヅラあ・・・」

丁度、俺も春雨に目をつけていたからなあ」

「ヅラじゃない！桂だ！何で春雨に目をつけているんだ？」

「ああ、春雨の団長が黒夜叉だと知ったからなあ・・・」

「なっ・・・！」

2人の会話に、近藤が

「桂と高杉、黒夜叉って誰だ？」

その質問に桂が、

「俺達が、一番憎むべき存在の奴だ。」

「銀時が憎んでいてもおかしくねえだろおなあ・・・」

それに、土方が

「おい、それってどう意味だ。

あと、ずっと気になっていたが、万事屋が屍を喰らう鬼とはどういうことだ？」

それに、桂が銀時を見ながら

「それは、あいつの過去を話さなければならないな。」

春雨（後書き）

次から、銀時の過去篇です

屍を喰らう鬼（前書き）

屍を喰らう鬼

カー

カー

屍の山に一人の子供が屍の上で、握り飯を食べていた。

その時、子供の頭に長髪の男が大きな手をおき、クシャツとしながら

「屍を喰らう鬼が出ると聞いてみれば、君がそう？

またずいぶんと、かわいい鬼がいたのですねえ。」

子供は男の手を払いのけ、警戒した。

そして、自分の身長より大きい刀をゆっくり鞘から出した

それを見ていた男は

「また、それも屍から取ったのですか？

童一人で屍の身ぐるみを剥ぎ、^{わらじ}そうして自分を護ってきたのです
ね・・・

たいしたもんじゃあないですか。」

子供は警戒したままだったが、男は話を続けた

「だけど、もうそんな剣、もういりませんよ。」

子供は、少しだけ男のほうを見た。

「人に怯え、自分を護るためだけに振るって来た剣なんてもう捨てちゃいなさい。」

そういうと、自分の剣を取り、子供に、投げ渡した。

子供は、とてもびっくりしながら、よろめきながらも、受け取った
「くれてあげますよ。私の剣。そいつの本当の使い方が知りたければ、私についてくるといい。」

子供は、じっと、男の背中を見た。

「これからは敵を切るためではない。弱き己を斬るために。
己を護るのではない。己の魂を護るために」

子供は、男を信用したのか、男についていった。

屍を喰らう鬼（後書き）

次からは、高杉&ゾラが出ます

「ゾラじゃない！桂だ！」

桂と高杉

男はついてきた子供に優しく微笑んだ。

その時、思い付いたのか男が、

「まだ名前言つてませんでしたね。私は松陽。君の名前は何ですか？」

しかし、子供は

「みんなから屍を喰らう鬼って言われてた。」

それに男が少し悲しそうに、

「そうだったのですか……」

その時男が思い付いたのか、

「銀時はどうでしょうか。」

子供は聞き返した。

「ぎんとき？」

男は優しく言つた

「銀色の髪をなびかせ、時代を歩く。それで銀時です。どうでしょうか？」

「いやじゃない。」

その時、子供と男の前に

一軒の屋敷が、やって来た。

「あれって何？」

男は笑いながら

「あれは、私の私塾です。」

「私塾？」

「あなたの仲間も出来ますよ」

そのときだった。

「松陽先生っ！！」

紫のかかった髪をした少年と長髪の少年が走ってやって来た

銀時は、松陽の後ろに隠れた。

「銀時、隠れなくてもいいですよ。あの子達は、あなたの味方です。」

銀時は恐る恐る、松陽から離れた。

それを見た、紫のかかった髪をした少年と長髪の少年が

「松陽先生、そいつだれだ？」

松陽が、

「小太郎、晋助、銀時です。自己紹介しなさい。」
最初に桂が言った

「桂小太郎だ。銀時よろしく」

次に高杉が言った

「高杉晋助だ。」

銀時が

「ヅラと高杉？」

すると、桂が

「ヅラじゃない！桂だ！」

それに、銀時と高杉が笑い、松陽もつられて笑った。

大切なもの、大切な仲間

銀時が松陽と会ってから、9年が経った。

銀時には、信頼できる仲間がたくさん出来た。

桂と高杉とは大親友といえる仲になった・・・毎日喧嘩はするが

そんな楽しい日々を送っていたそんなある日の夜の事。

生徒は帰り、私塾には、銀時と松陽だけ。

銀時は、寝ていたが、嫌な予感がしたらしく、起きて松陽の部屋に向かった。

そのときだった。

ドカーン！

松陽の襖が吹き飛び、人も吹き飛ばされた。

銀時は急いで松陽の部屋へ向かった。

松陽は、血まみれになっていた。

「松陽先生！」

銀時の声に松陽が

「銀時・・・奴がきます・・・早く逃げなさい・・・」

銀時は松陽に聞き返した

「奴・・・？」

その時だった。

砂煙から編笠をかぶった男が現れた

「お前・・・！」

銀時は刀を構えた、しかし

ガシッ

松陽が銀時の足を掴み

「銀時・・・！やめてください・・・私は・・・もう・・・長く・・・
ありません・・・
あなたは・・・あなたの・・・信じ　る道を・・・貫いて・・・
仲間を・・・大切な・・・ものを・・・護り・・・生き抜い
て・・・下さい」

「松陽先生！」

松陽は、優しく微笑みながら、言った。

「お話は終わりましたか？松陽。」

松陽は剣を支えにして立ち上がった。

その時だった。

ドカーン！！

「何が起きたんだ！」

「何が起きたかって？爆弾を仕掛けておいたのですよ。幕府に命じられていましてねえ。」

「幕府・・・！」

「まあ、名前だけ名乗っておきますか。私の名前は『黑夜叉』
それでは、また会う日まで。『屍を喰らう鬼』」

その時、柱が倒れてきた。

「銀時・・・もう行きなさい！」

松陽は銀時を押し、私塾の外に出させた。

銀時が出た瞬間、私塾に全て火の手が回り、私塾が崩れた。

銀時は膝を地面につき、土を手で掴み、炎の塊となっていました。私塾を涙を流した目で見ながら泣き叫んだ。

「・・・先生え・・・松陽先生えゝ！！！！！」

次の日、桂と高杉は驚いた。

昨日まで通っていた私塾が崩れ、目の前で銀時が泣いているからだった。

「銀時！何があつたのだ！」

銀時は、泣きながら悔しそうに言った。

「松陽先生が・・・！幕府の『黑夜叉』に・・・！殺された・・・！」

「なっ・・・！！！」

「なんで、そんな事すぐに教えてくれなかったんだ！！！」

高杉が、銀時に詰め寄った。
それに桂が

「やめんか、高杉！」

その時だった一人の女が銀時を指差し、

「ねえ、あれ『屍を喰らう鬼』じゃない？」

「だから松陽さんが死んでしまったのか！？」

「『屍を喰らう鬼』が居たから松陽が殺されたのか」

一人の男が石を投げながら

「屍を喰らう鬼は出てけ！」

その一言から、他の人々も石を投げながら銀時に罵声を浴びさせた

「そっだー！出てけ！」

「出てけ！」

「屍を喰らう鬼は消えろ！」

銀時に、たくさんの石が体に当たっていった。

その時だった、銀時の前に桂と高杉が立った。

「やめろ！」

「大の大人が何をやっているのですか！恥ずかしいと思わないのですか！」

桂と高杉の言葉に、仕方なしに村人が帰っていった。

村人が帰ってしまい、そこにいたのは銀時と桂、高杉しか居なかった。

高杉が、振り絞った声で、言った。

「俺は松陽先生の敵打つために・・・攘夷戦争に出る！」

それに続き、桂が

「俺もでる！男子たるもの師匠の敵討つべし！銀時はどうするのだ？」

それに銀時は考えた

「先生が・・・信じる道を貫いて仲間を大切なものを護り生き抜いて下さいって言ってたから俺は仲間を護るため俺は攘夷戦争にでる・・・！」

失ったもの、憎きもの

銀時たち三人は、攘夷戦争に出るため江戸に行くところのことだった。

「銀時、高杉今日はここで野宿するぞ。」

「いいぜえ」

桂の言葉に、高杉が答えた。

しかし、銀時は周りを警戒していた。

その様子を見た、高杉が

「銀時い、どうしたんだ？」

銀時はまだ周りを警戒しながら言った

「俺達の周りに誰がいる。」

それに、桂が驚きながら

「銀時、それは本当か！」

「ああ。たくさん居るぜ。」

その時だった。茂みの中から物音が聞こえた。

ガサガサッ！

銀時たち三人は各々の刀を鞘から出し、構えた。

それと共に、茂みの中から三匹の天人が現れた。

「おいおい、此处に餓鬼がいるぜえ。こいつらも、あの松陽のころの餓鬼かあ？」

「松陽の餓鬼は全員やったはずじゃなかったか？」

「でもまだ居たようだなあ」

天人の言葉に、桂は、

「銀時、松陽先生をやったのは、あの天人か？」

しかし、銀時は桂の質問に答えず。

それに、桂が

「おい、銀時！」

その時、銀時が、

「……さねえ、ゆるさねえ！俺の……俺の大切な仲間を殺した奴は絶対……許さねええ！！！」

そういうと、銀時は、天人三匹を一人で、瞬殺した。

グサアア！グシャアア！グサアア！

「グアアア！」「グアアア！」

銀時は三匹が死んだのを見届ると、

「ツラア、高杉行くぞ」

「ツラじゃない！桂だ！銀時、何処に行くのだ？」

桂の質問に銀時がキョトンとした顔をしながら、

「決まってるじゃん。野宿場所探しだよ。ツラ、お前此処で寝るのか？寝たかったら寝てもいいんだ。ぜ？高杉、行こうぜ」

銀時が、高杉に、ニヤツと笑い、高杉もそれに答え

「ああ、分かったぜえ」

そういうと、高杉と銀時は歩き出した。

桂もあわてて、高杉と銀時の後を追いかけた。

失ったもの、憎きもの（後書き）

短い・・・この章めっちゃ短い！！（泣）

銀魂第二期おめでとう！！

つかの間の幸福

「この後はお前らも分かるように、俺達は攘夷戦争に出て、負けた。」

「俺は、お前らも嫌いだが、一番幕府が嫌いだ。」

「俺も高杉と一緒にだ。だが、銀時に池田屋の時にこの国の大切さを教わった」

目を赤くした神楽が

「そんな事があつたなんて・・・知らなかったアル。」

「高杉と桂がテロリストになった理由分かりますぜい・・・もし俺の姉上が幕府にやられたら俺も幕府を恨みまさあ。」

神楽と同じく、目を赤くした沖田が言った。

「しかし、そんな事実があつたとは・・・そんな理由があつたのならお前らを攘夷志士と言つて

捕まえない。だが、桂は爆弾魔だし、高杉は、人を斬りまくっているからなあ・・・」

「「えゝ!!!」」

「土方、俺は最近何もやってないぞ。」

「俺もだぜえ」

「えゝ！！！じゃ無いでしょー！」

その時、

「ごほッごほッ・・・」

銀時が、苦しそくに咳き込み、血を吐いていた。

『銀ちゃん！／銀さん！／旦那！／銀時！／万事屋！』

新八たちは銀時に近づいた。しかし、

「おまえらぁ・・・近づく・・・な！」

薬のせいで、銀時の声は掠れ、力なく聞こえた。

それに、息も荒かった。

銀時の言葉に新八と神楽が

「嫌ネ！ずっと銀ちゃんの傍にいるアルね！」

「そうです！僕達はずっと・・・銀さんの傍に居ますから！」

2人の言葉に銀時が薄く笑いながら

「あり・・・がとう・・・な」

新八、神楽、真選組の三人、桂、高杉も笑顔で頷いた。

しかし、

「・・・うあっ！ごほッごほッ！ぐああ！」

激しく咳き込み・・・大量の血を吐いた。

『銀ちゃん！／銀さん！／旦那！／銀時！／万事屋！』

新八たちは、叫んだ。

「やべえ・・・もう・・・限界っ・・・だぁ・・・お前ら・・・急いで・・・逃げる・・・」

銀時は、血を吐きながらも言った

「嫌です！僕達は・・・」

「いいから・・・逃げろっつっ！！！」

銀時は大声で叫び、全員啞然とした。

「やべええんだ・・・俺は・・・俺は・・・間違はなく・・・お前等をやってしまうかもしれないねえ」

銀時に一筋の涙が伝った。

「誰も・・・誰も・・・失いたくねえんだ・・・だから・・・逃げ
てくれ・・・」

「その必要はありませんよ。」

全員、声がした方を見た

そこには

「お前はっ・・・天道衆副長斗卿・・・！」

天道衆副長、斗卿がいた・・・

「何しに来たアルか！」

神楽は、銀時の前に立ち塞がった

「白夜叉を迎えに来ましたよ。」

『?!』

「素直にこっちに渡してもらえませんかねえ。渡してくれないというのなら・・・」

斬りますよ?」

「馬鹿言つなヨ・・・」

神楽は、斗卿を睨みながら言った。

「渡せといわれて、簡単に渡すわけにはいかないアル!

銀ちゃんは私たちの大切な家族アル!! 銀ちゃん連れて行くこと
するなら・・・

こっちも容赦しないネ!」

そして、新八、近藤、土方、山崎、高杉、桂も

神楽の横に立ち、静かに刀を鞘から抜き、構えた。

信じるもの

斗卿は、薄く笑いながら

「仕方ないですねえ。しかし白夜又は何が何でも連れて行かせて貰いますよ？」

死んでも知りませんよ？誰が何だろうと・・・ね？」

その時

「そうは・・・させねえ・・・！」

新八たちが、後ろを振り返ると、そこには荒い息をしながらも斗卿を睨みながら立つ

「銀時・・・」

銀時がいた・・・

銀時は倒れそうになっても体を木刀で支えて立っていた。

「万事屋！無理するな！」

『旦那！』

土方、山崎、沖田が叫んだ。

それに、銀時は笑顔で

「大丈夫だ。絶対戻ってくるから。」

そう言うのと、銀時は新八たちの前に立ちはだかった。

「編笠さんよお・・・俺はお前についていくもねえし、新八たちを傷つける気もねえ・・・」

「ただし・・・こいつらを・・・護る気なら大ありだあああ！！！！」

銀時は斗卿に斬りかかった。

斗卿は薄く笑いながら

「私相手にやるのですか。面白い。やろつじゃないですか。」

そついつて、鞘から刀を出し、構えた

ガキッ！ガキガキイン！！

ガキッ！ガキイン！

二人は、互角に戦っていた。

「す・・・すごい・・・」

「互角でさあ・・・」

護るもの、大切な仲間（前篇）

斗卿は、薄く笑いながら

「仕方ないですねえ。しかし白夜又は何が何でも連れて行かせて貰いますよ？」

死んでも知りませんよ？誰が何だろうと・・・ね？」

その時

「そうは・・・させねえ・・・！」

新八たちが、後ろを振り返ると、そこには荒い息をしながらも斗卿を睨みながら立つ

「銀時・・・」

銀時がいた・・・

銀時は倒れそうになっても体を木刀で支えて立っていた。

「万事屋！無理するな！」

『旦那！』

土方、山崎、沖田が叫んだ。

それに、銀時は笑顔で

「大丈夫だ。絶対戻ってくるから。」

そう言うと、銀時は新八たちの前に立ちはだかった。

「編笠さんよお・・・俺はお前についていくもねえし、新八たちを傷つける気もねえ・・・」

「ただし・・・こいつらを・・・護る気なら大ありだあああ！！！！」

銀時は斗卿に斬りかかった。

斗卿は薄く笑いながら

「私相手にやるのですか。面白い。やろつじゃないですか。」

そついつて、鞘から刀を出し、構えた

ガキッ！ガキガキイン！！

ガキッ！ガキイン！

二人は、互角に戦っていた。

「す・・・すごい・・・」

「互角でさあ・・・」

新八と沖田は感嘆の声を上げていた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「やっぱりこの力とスピードやはり白・・・」

ガキイン！

「その名前を・・・出すんじゃないええ！！！」

銀時は、斗卿を押し返した。

「これでは、きりがありませんねえ。あの手を使いましょうか。これでおわりですよ。」

斗卿はニヤリと笑いながら言ったと同時に、銀時の前から姿を消した。

斗卿の向かった先は、新八だった・・・

「新八！危ないアル！」

「！？」

しかし、新八は何も出来ず。

斗卿は、新八の前に立ち、高く振り上げ・・・

ザシュウツツ！

「ぐはぁぁあ！」

斗卿が斬ったのは

銀時だった。

銀時は、斗卿が刀を降り下げるまでに新八の所に行き、新八を突き飛ばし、盾になったのだった

「ぎ、銀さあ ああんん！！！！」

「銀ちゃあ ああんん！！！！」

「旦那あ あああ！！！！」

「万事屋あ あああ！！！！」

「銀時いいいい！！！！」

銀時は、肩から腹にかけて斬られていた

ズサッ

とうとう、銀時は倒れてしまった・・・

斗卿は薄気味悪く笑いながら、血が滴る刀を持っていた

高杉は、斗卿の言った言葉に気になったのか、

「おい斗卿。お前えは最初から銀時狙いでやったのか？」

斗卿は、笑いながら

「そうだと言ったらどうするのだ？」

斗卿はそういった後、倒れている銀時のもとに行こうとした。

しかし・・・

「銀ちゃんに近づくなアル！」

神楽が斗卿の前に立ちはだかった。

「銀ちゃんをこれだけ苦しめるなんてもう許せないネ！まだ銀ちゃんを苦しめるのならこの傘が

火を吹くネ！」

神楽は、斗卿を睨みながら言った。

斗卿除く新八たちも神楽の気持ちと一緒にだった。

新八、桂、高杉、土方、近藤、山崎は神楽の横に立った。

斗卿はそんな、新八たちの様子を見ながら

「仕方ありませんねえ。全員始末しますか。」

そついうとニヤッと笑った。

そして

刀を振り下げた

その時だった。

ガツキイン！！

護るもの、大切な仲間（後編）

ガッキイン！

斗卿の刀を止めたのは、倒れていた銀時だった。

「な・・・何故!？」

斗卿は驚いていた。

「何故かって？俺は仲間を護るためなら何度でも立ち上がるんだよ・・・!!」

銀時は、紅い、まっすぐな目で斗卿を睨んでいた。

「銀さん・・・!」

新八たちは銀時を見ていた。

しかし、すぐに銀時はうずくまってしまった。

さつきやられた傷が深かったのか傷口から紅色の血が流れ、息を荒くしていた。

それを見ていた斗卿は

「護れないのに護るなんていつからそうなるんですよ。白夜叉。」

ドクンッ

「ウアッ！グアアアア！！」

銀時は苦しみだした。しかし、斗卿は止めなかった。

「白夜叉。お前は何も護れない天涯孤独な存在なんですよ。お前に護れるものなんぞ、一つたりと もありませんよ。」

銀時は苦しみ続けた。涙を流しながら。

その時

「・・・じゃねえヨ。ふざけんじゃねえヨ！」

神楽は叫んだ。

神楽は、殺気をかもしだし、怒っていた。

銀時のことを斗卿が、「天涯孤独」と言ったから。

「銀ちゃんは・・・天涯孤独じゃないアル！銀ちゃんには私たちが居るアル！」

新八も神楽に続き

「銀さんは・・・僕達の大切な」

「家族です！！／アル！！」

「万事屋には、俺達も居るぜ。なあ？近藤さん、総悟、山崎」

近藤、総悟、山崎も力強く、頷いた

「これ以上やるのは時間のロスです。無理やり、連れて行かせて貰いますよ?」

その時、

「新八、神楽、ゴリラ、大串君、総一郎君、ヅラ、高杉・・・ごめん」

銀時は、静かに目を閉じ立ち上がった。

『万事屋／銀時／銀さん／銀ちゃん・・・?』

銀時は、持っていた刀を首筋に当てた。

その時、全員が銀時が何をしようとしているのか察知した。

真っ先に動いたのは、土方だった。

「万事屋!」

土方は、銀時の刀をはじいた。

「何てことしようとしてんだ!」

土方は、銀時の肩を持ち、まっすぐ銀時の目を見た。

「・・・もう無理なんだ。俺には、護れる気がしねえ。だから・・・」

パアアン！

土方は、銀時の頬を平手打ちした。

「・・・ッ！」

「お前がそんな弱気でどうすんだ！お前が餓鬼を護らなかつたら餓鬼はどうすんだ！護るもんが沢山在るんだろ！今弱音吐いたら護れねえぞ！銀時！！」

土方は、銀時の胸倉を掴んで言った。

銀時は、涙を流しながら刀を拾い上げ、土方のほうに振り向き

「そおだなあ・・・ありがとよ。大串君」

薄く笑った。

「大串じゃねえって言ってるだろ。」

土方も薄く笑った

しかし、

ザシュッ！

斗卿は

腹を刺した。

銀時の

銀時はとてつもない痛み息をする事もままならぬ

倒れた、崩れるように。

『万事屋／銀時／銀さん／銀ちゃん……！』

新八たちは、銀時に駆け寄ろうとした時、

斗卿は、銀時を抱え宙に飛んだ

「銀さああん！！！」

「銀ちゃああん！！！」

「旦那あああ！！！」

「万事屋あああ！！！」

「銀時iiiiiiii！！！」

しかし、銀時は気を失ったままだった。

斗卿は、壁に飛び乗ると行ってしまった。

宣告

斗卿は、銀時を連れてアジトに帰った。

「只今帰りましたよ。黑夜叉様。」

「ご苦労、斗卿。白夜叉は意識を失っているみたいですね」

「黑夜叉様、白夜叉は自分の力を制御できるようです。」

「そうか・・・あの薬を打つか。」

そういつと黑夜叉はにやつとし、

「斗卿。白夜叉を監禁部屋に連れて行くように。あと、奴らに言うておけ。」

『5日後、ターミナルに来い』ってな。」

「わかりました。」

斗卿は部屋から出た。

「5日後が楽しみだ。楽しい喜劇が見れる!」

部屋には、黑夜叉の狂った笑い声が響いた。

一方その頃、万事屋に一人の女がやって来ていた。

お妙だった。卵焼き《ダークマター》を新八たちに持ってきたのだった。

ピンポン

「銀さーん居ませんかー？」

しかし、誰も居なかった。

「寝ているのかしら？」

ガラガラ・・・

お妙は万事屋の引き戸を開けた瞬間何かおかしいと思ったのだった。

万事屋の中で誰かと争った形跡があったからだ。

お妙は、リビングに来たとき目を丸くした。

そこには、いつもの社長机と椅子。そしてソファ二つと机といういつもの万事屋の様子は跡形もなく、社長机と椅子、ソファ二つと机は無残に壊れたくさんの血がついていた。

お妙は、万事屋3人を探すため、真実を探るために真選組に向かった。

お妙は、真選組に着いた。

しかし、真選組の様子がおかしかった。

いつもはザワザワしていてもおかしくないのに、やけに静かだった。いやな予感がしたお妙は急いで真選組の中に入った。

「新ちゃん、神楽ちゃん」

そのとき、万事屋でも漂っていた血のにおいが、漂っていた。

お妙はそれを頼りにして行った。

約5分たったときにある一室に着いた。

そこに、新八たちが居た。

しかし、ある者は顔を伏せて泣き叫び、ある者は空を見ながら泣き、ある者は腕をくみ、目を閉じていた。

そしてそこらじゅうに飛び散ったたくさんの血痕・・・

お妙は、口を押さえ、床を見た。

そこには、銀時が、離身離さず持っていた木刀があった。

「銀さん・・・」

その時、神樂がお妙の存在に気づき

「姉御・・・」

「神樂ちゃん、何があったのか教えてくれる？」

お妙は、神樂に優しく聞いた

「・・・銀ちゃんが・・・斗卿って奴に薬打って連れ去られたアル・・・」

「神樂ちゃん・・・」

神樂は泣きじゃくりながら言った。

その時

「お取り込み中しませんねえ。」

泣いていた新八たちの前に現れたのは斗卿だった。

新八たちは警戒していた。

刀を構えて。

それを見た斗卿がふふつと笑い

「今日は戦うために来たんじゃないんですよ」

新八は睨みながら

「じゃあ、なんで来たんですか？早く銀さんを・・・銀さんを返せ！」

「そうネ！銀ちゃんは何処にやったネ！？」

新八に続き、神楽が言った。

「白夜叉ですか・・・今、黑夜叉様の手で、白夜叉を最終段階にさせています」

「おい、おめえ。さっき黑夜叉と言ったな・・・！」

高杉は狂ったように怒り、刀を振り下ろそうとした時、

「高杉今は落ち着け！」

高杉を桂が止めていた。

「ゾラ！憎くねえのか！？俺たちから松陽先生を奪ったのは誰だ？黑夜叉だ・・・！それを・・・見逃せというのか！」

高杉を止めていた、桂は伏せながら言った。

「ああ・・・憎いさ・・・でも、今はそれをしてるときではないんだ！銀時を助けるのが先決だ！」

高杉は仕方なさそうに刀を下ろした。それと同時に新八たちも刀を下ろした。

その時、桂が警戒しながら、

「お主、最終段階とはどういうことだ？」

斗卿は鼻で笑いながら

「私たちが打った薬より強力な、薬を打ち白夜叉の精神を全てぶっ壊す。」

「そんな・・・！」

「なんで・・・なんでそこまでしないといけないアルか?! 私たちの銀ちゃんを返すアル！」

すると、斗卿は

「5日後、私たちは白夜叉を連れて日が昇ると共にターミナルに来るので。白夜叉を返して欲しければ、来るがいい。」

「なっ・・・！」

「それでは楽しみに待ってますから。」

そういうと、斗卿は姿を消した。

監禁

一方、銀時は監禁部屋に手と足を縛られていれていた。

カッン・・・カッン・・・

そこに、黒夜叉がやって来た。

「苦しんでいるようだなあ、白夜叉。」

「う・・・るせえ。俺を・・・こんな事を・・・して・・・何を・・・するつもりだ・・・」

黒夜叉はニヤツと笑い

「前の薬より、強い薬を打つ。そして、・・・」

銀時は、目を見開き

「あいつらを・・・やるのは・・・やめてくれ・・・」

「無理ですよ。全ては、お主白夜叉が悪いのですから。それでは、
悲劇をはじめましょ う・・・」

そついうと、黒夜叉は銀時の首筋に薬《注射針》を近づけた

「やめて・・・くれ。やめてくれ・・・!」

しかし、銀時の足掻きもむなしく碎け散った。

黒夜叉は

銀時の首筋に

薬《注射針》を

打
っ
た

ドクン・・・！ドクン・・・！

速くなる鼓動

熱くなる体。

「グアアアアアアアア！！！！！！」

黒夜又は銀時の様子を見て薄く笑っていた。

「さあ・・・悲劇^{シヨ}の始まりだあ」

この声は誰にも聞こえなかった。

そして、黒夜又は監禁部屋から出た

銀時SIDE

帰ってえ・・・

沖田・・・

土方・・・

近藤・・・

桂・・・

高杉・・・

そして

新八・・・

神楽・・・

仲間の顔が頭の中に浮かんだ

俺の頬には涙が流れた

戻りてえよ・・・いつもの生活に・・・

帰りてえよ・・・新八・・・神楽・・・

俺の意識はそこで途絶えた。

サア・・・

メザメヨ白夜叉

楽シイ悲劇^{ショー}ノハジマリダア

作戦会議 一つになった気持ち

お妙は、土方から銀時が居ない理由、全てを聞いた

「そんな・・・なんで、銀さんが・・・」

お妙は、顔を伏せた

その時だった。

「銀ちゃんを助けに行くアル！」

神楽が言った。

「チャイナもたまにはいいこと言うじゃないかい」

「たまにはは、余計ネ！」

その時、伏せていたお妙が

「お前えら静かにするってことをしらねえのか？ああん？」

『す・・・すいませんでした・・・』

あの高杉でも謝るほど、お妙は怖かったのだろっ。

恐るべし・・・お妙

そんな中土方が果敢に、口を開いた

「おい、高杉と桂。斗卿と黒夜叉の居場所は分かったのか？」

「ああ。わかったぞ。」

「奴らは、ターミナルの地下に居る。」

高杉が言い終わると同時に、お妙が凜とした声で

「私も銀さんを助けに行かせて貰います！私も銀さんに九ちゃんの時の借りを返したいから・・・」

「姉上・・・」

少しの珍黙。破ったのは桂と高杉だった。

「わかった。お妙殿を認めよう」

「でも、死ぬかもしれないぜえ」

桂と高杉をとめようとしたのは、土方だった

「おい、桂と高杉。それは正気か？！」

土方の言葉に桂が

「土方、お妙殿を見る。まっすぐな目をしている。それなのにとめる事は出来ぬだろう？」

「しかたねえ。」

お妙は、満面の笑みで

「ありがとうございます！」

そう言った

土方が、作戦を言おうとしたとき、桂がそれを手で制し、新八たちを見回しながら言った

「お前らも知っているとおり、普段でも銀時は相当強いのに、薬を飲まされ、白夜叉と化し

た銀時は普段より数十倍強いはずだ。死んでもおかしくない。それでも行くか？

今なら、まだ引き返せるぞ。」

「銀ちゃんは何になっても、行くヨロシ！銀ちゃんは私の大切な家族アルネ！」

「万事屋に説教しちまったからなあ・・・それに借りも在るし。」

「旦那には、動乱篇の時の借りが在りまさあ」

「俺も副長たちと同じです！」

「俺も、万事屋を助けに行きたい」

「銀さんを絶対助けたいです！」

「僕の気持ちも皆と一緒にです！」

高杉と桂は笑い神楽、新八、お妙、土方、山崎、沖田、近藤も笑い返した。

「銀時はしあわせ者だな」

「そうだぜえ」

土方は、皆を見回してから

「五日後の決戦にむけての作戦会議をする！まず姐さんは怪我人の応急処置と雑魚の退治。姐さんなら それくらいなら出来るはずだ。いいか？」

土方はお妙のほうを向き、了解をえた。

「いいですよ。それで。」

土方は少し頷き、次は新八と神楽、近藤、沖田、山崎のほうを向いた。

「まず近藤さんは、此处で待っていてくれ。真選組の大將がやられたら終わりだ。」

すると近藤は

「分かった。必ず帰ってこいよ。」

『ああ』

土方、山崎、沖田は頷いた

「次に、山崎と総悟、俺、眼鏡、チャイナで斗卿を倒す。それと平行に高杉と桂。」

桂と高杉の方を見た

「お前らは、決戦の前日までに薬を奪って来い。それから万事屋を元に戻したら

黒夜叉を倒せ。」

高杉と桂は驚いた。黒夜叉といえば天道衆のトップ。しかも幕府の者だ。それを土方が斬れというのだ。

「黒夜叉といえは天道衆のトップ。しかも幕府の者だ。お主がそんなことを言って良いのか？」

桂は、土方に聞いた

すると、土方は

「もともと、胡散臭えと思っていたからな。あと、俺は幕府の下に就いたつもりはねえ。俺達、真選組の大将はただ一人。近藤さんだけだ。」

土方の言葉に、高杉と桂が

「土方、それは斬っても良いと受け取ってよいのだな。」

「もう、後戻りはできねえぜえ」

「ああ。」

土方は、桂と高杉に返事をする、

「高杉、桂、眼鏡とチャイナ、そして姐さんは決戦前日の午後一時に此処に來い。準備をする。」

「「わかりました」」

「わかったアル！」

「わかった」

「わかったぜえ」

そういうと、新八たちは帰っていった。

作戦会議 一つになった気持ち（後書き）

会話文・・・多くな？

人は見た目ではない。中身である！（前書き）

この章はきやら崩壊（特に高杉）&作者も後半にでます・・・

高杉ファンの方、先に謝っておきます・・・

すいません！！

人は見た目ではない。中身である！

決戦前日の午後五時、

真選組の4人とお妙、新八、神楽そして高杉と桂は屯所に居た。

「よし！全員いるな！」

近藤が、全員居ることを確認した後

「事情は、松平のとつつあんには俺から話しておいた。お前ら！いつも以上に暴れて来いよ！」

その後、土方が

たくさんの刀や銃や薙刀と隊服五枚を床に置いた

ガチャン

「土方さん……」

「今回だけだぞ。」

「あ……有難うございます！」

その時、桂が新八の元へ行き、一本の木刀を渡した。

「これは……銀さんの……木刀!?」

新八はびっくりしていた。

「そうだ。銀時の木刀だ。これは、新八くんが持っていた方がいい
と思ってな。」

「桂さん……」

そこで、土方が思い出したかのように

「おい、高杉と桂、薬はどうした？」

それに、高杉が答えた

「もうすぐで来島が持ってくるはずだぜえ」

「高杉……来島って来島またこの事か?!」

土方が聞いた。すると神樂が

「またこって染み付きパンツアルか?!」

多分、紅桜の事を言っているんだろう……

哀れ……来島またこ……

その時だった

パンパン!!

「染み付きパンツじゃないもん！晋助さまぁー！一回確認してくださいっス！」

またこは、銃を撃ちながら言った。

「ちよっ・・・！来島さん！危ないですよ！高杉さん！何か言って下さいよ！」

すると、高杉は

「来島あ、その餓鬼と遊ぶのは、後でやってやれ。頼んだブツを出せ。」

「わかりましたあ！これっす！晋助様！」

またこは、一本の注射器を高杉に渡した。

「よくやった。来島、餓鬼と遊んでいいぞ。」

「・・・」

またこは黙るしかなかった。高杉が勘違いしていたから・・・

高杉以外はこう思った

『（高杉って・・・天然?!）』

このとき、高杉以外の心がひとつになったときだった。

そんなことを知らない、高杉は、土方に見せた。

「土方、これが薬だ。一回分しかないみたいだぜえ」

我に返った土方は

「・・・あ、ああ。わかった」

すると、近藤は

「今日は皆ここで泊まってくれ！明日は早いからな！」

それに、お妙は

「土方さん？このゴリラから一番離れた部屋お願いできます？」

それに土方は

「・・・ああ。わかった。山崎！空いているか見て来い！」

「わかりましたああ！」

山崎は、土方の命令に従ったのだった。

最終的にはお妙と神楽は近藤から一番離れた部屋になり、あとの男性陣は適当に割り振られたのだが・・・

「おい、ツラア・・・なんで俺は外なんだ？」

（＊またこは帰りました）

・・・どうやら高杉には部屋は与えられず、外で寝ると言われたらしいです。

・・・沖田さんに。

「沖田が決めたのだから仕方ないだろう？ドSだから」

そう、高杉は知らなかったのです！

沖田がドSな事に！

哀れ・・・高杉・・・

しかし、桂の言葉はまだ続いていたのです

「でも、本当は作者が決めたのだがな。」

高杉の怒りスイッチON！

「ツラア・・・作者ぶっ殺してくる・・・！」

「いや・・・高杉やめておいた方がいいのでは無いか？」

そう・・・！そうです！桂さん！

・・・まあ全ての元凶はあなたなんですけどね・・・

「誰が何と言おうと作者ぶっ殺す・・・！」

・・・え？

誰が何と言おうと作者ぶつ殺す？

やべええええ！！！！

ってマジできたああああ！！

ぎゃあああああ！！

プツン・・・

——— 少しお待ちください ———

はあああ・・・

マジでやばかったよ・・・

ちなみにこの後、高杉は、部屋で寝ることができました

人は見た目ではない。中身である！（後書き）

さて！次の章から皆さんお待ちかね！↑本当なのか？

薬で覚醒した、銀さん登場！

さあどうするっ？！

新八たち！

それぞれの準備（前書き）

タイトル・・・意味わかんない!？

それぞれの準備

「真選組屯所」

「お前等ああ！今から出るぞ！準備はできたか！」

土方が声を張り上げた

「おうっ！」

皆も声を張り上げた

土方は、それに頷き

「今から銀時を助けに行くぞ！」

そういうと、土方は近藤の方をむき

「じゃ、近藤さん行ってくるぜ。」

それに、近藤がはにかんで

「絶対、誰一人欠けることなく、帰ってこいよ！万事屋も含めてな
！」

と、いうと皆もはにかみ、屯所を出た・・・

「アジト」

カッン・・・カッン・・・

黒夜叉は、ある一室の前で足を止め、扉を開けた。

そこには、

黒夜叉から渡された白装束を着て

髪は長くなり

殺気だった冷たい目をした

銀時・・・いや白夜叉と化した銀時が、

そこに居た。

「白夜叉、準備はできたか？」

黒夜叉の言葉に白夜叉と化した銀時がコクンと頷き

「そうか、今から行くぞ。」

黒夜叉が言い終わると白夜叉と化した銀時は黒夜叉の横をすり抜け、そこには黒夜叉しか居なかった。

「フフ・・・悲劇^{ショー}の始まりだあ・・・」

この言葉を聴いていたものは誰一人居なかった・・・

「ターミナル（新八たち側）」

歩いて、約20分経ったころ、新八たちはターミナルに着いた。

「お前等ああー！！絶対生きて帰るぞ！生きる覚悟だけしろ！分かったな！」

土方がそういうと、ニカツと笑い皆も笑いながら

「沢山暴れるぞ！」

「オォー！」

そう言うのと、ターミナル内に新八たちは入って行った。

「ターミナル（黒夜叉側）」

「白夜叉あ此処に来た奴は全員お前の敵だ。全員殺せ。わかったか

「？」

白夜叉と化した銀時はコクンと頷き、黒夜叉の横をすり抜けどこかへ行ってしまった。

そこに残った黒夜叉は

「ふふ・・・これで計画通りことが進みそうですねえ」

それぞれの準備（後書き）

何か短いいいいい！！！！

あ、あと覚醒した銀さん出すって言ってたけど全然出てませんね・

・

はい。

すいませーん！！

開戦

新八たちはターミナルの地下に居たが、誰も居なかった

そんな時、土方がつぶやいた

「おいおい・・・静かすぎじゃねえか・・・？」

その時、桂が

「不幸は急に来るもの・・・今がそついう状況だな・・・」

それに新八が首をかしげた時だった

カツン・・・カツン・・・

新八たちは一気にその音の元凶の方を見た、そこには斗卿が居た。

「あらあら・・・皆さんお揃いですねえ・・・」

「早く銀ちゃんを返すアル！」

神楽が斗卿を睨みながら言った。

それに、斗卿が

「それはどうでしょう・・・白夜叉には今精神が無く、それ以前に
もしかしたら貴方達の記憶を無くしているかも知れませんかねえ・
・・・」

「なっ・・・！」

新八たちは驚愕した。

銀時が

自分たちとの記憶をなくしているかも知れないということに

その時神楽が

「銀ちゃんが白夜叉になっても記憶を無くしても・・・絶対銀ちゃんを戻すネ！」

銀ちゃんは・・・大切な」

「家族アル！」

「家族だから！」

新八と神楽は同時に言った。

斗卿は鼻で笑い

「ふふっ・・・そんな事に捕らわれている貴方達が白夜叉を取り戻せると・・・」

面白い！面白いじゃありませんか！じゃあ始めましょうか！悲劇^{ショー}を！」

ザシュウッ!!

「この女只者じゃねえ!」

しかし、お妙は天人の喋る暇を無くす位、倒していった。

お妙は傷を受ける事も無く天人を倒していった。

お妙がとても強かったのか、天人たちが弱かったのか、二十分たったころ其処に立っていたのはお妙だけだった。

「じゃあ行きますか・・・」

お妙は走って、土方や新八のもとへ向かった。

開戦（後書き）

さて・・・！皆さんにお知らせですっ！

この「鬼殺し」の続編を作りたいと思います！

内容は？って？

そんなのまだ決まってるじゃないですか↑おい！

神威

お妙が新八たちの方に向かっている頃、新八たちはターミナル最上階に向かっていた。

その時、

「あのお待さんの仲間？弱い奴には興味ないよ。」

新八たちは声のするほうを向くと春雨第七師団団長、神威がそこにいた。

「おい、あれって・・・」

驚きながら土方が言った。

それに、神樂が

「なんで・・・なんで神威がいるアルか？！」

それに神威が

「神樂もいるのか・・・弱い奴には興味ないよ。」

そういうと、傘を投げた。

ビュンッ！

「危ない！リーダー！」

「神楽ちゃん!!」

その時、神楽の前に出て神楽を守ったのは

沖田だった。

ガキンッ!

「総悟っ!」

沖田は剣で傘をはじいた。

「チャイナ、もうすぐでやられるところだったぞ。」

それを見ていた神威は手を叩きながら

「へえゝ君やるねえゝ強いのか?」

静かなターミナルの中で神威の声が響いた。

神威は傘を取りに行きながら

「それにしてもっ・・・君って面白いねえゝ神楽を守って自分を傷つけるって」

それに、神威と沖田以外驚いた。

剣で傘をはじいた時に怪我をしたのだろう

沖田の腕からは、ドクドクと血が滴り、ポタポタと冷たい床に落ちて染みを作っていた。

それを見た神楽は

「なんで私を庇ったアルか?!」

「なんでい。もう少し素直に礼を言えないのかい」

そんな神楽と沖田の様子を見ていた土方が喧嘩の仲裁をした。

「おめえら。今は喧嘩している場合じゃねえだろうが。」

土方の言葉で、沖田と神楽は渋々、喧嘩をやめた。

皆がほっとした時に、神威が

「ねえ、俺の相手は誰なの?強い奴じゃないと楽しくないなあ」

その時、

「わっちらが相手をしてやる!」

「貴方達は行きなさい!後から私たちは向かうから!」

新八たちが振り返った先には

吉原の百華の頭、月詠

元御庭番衆、殺し屋さっちゃんこと猿飛 あやめ

がそこにいた。

そして、後からお妙が走ってやって来た。

「姐上！」

その時、土方が

「こいつ等呼んだのはお前か！？」

それに、お妙が

「そうですよ？味方が多い方がいいと思ひまして。」

「それもそうだな。」

土方はお妙の言葉に賛同した。

その時、

「ねえ、早くしてくれない？もう待ちくたびれたんだけど」

神威が傘でもてあそびながら言った。

それを見た月詠、さっちゃんは

「さっきも言ったが早く行きなんし。」

「私たちも後から向かうから。」

それに土方は

「誰だかわからんが後から絶対来いよ。」

と言った後、神楽たちに

「おい、おめえら行くぞ。」

と言った。だが。

「マヨ、私ここに残りたいアル。」

「土方さん、僕も此処に残らせてください。」

神楽の言葉に土方は驚いて

「お前・・・！何言ってるのか分かってんのかわかって・・・」

「神威を・・・兄貴止めたいネ！」

「僕は神楽ちゃんを守りたいんです！」

「任せるヨロシ！」

「お前等を死なせたら万事屋に見せる顔が無い！」

土方は新八と神楽を止めようとした

それに神楽と新八は叫んで

『いいから早くいけえ！！』

それに、土方が

「ちゃんと来いよ。」

『分かってます（アル）！！』

土方たちは、新八と神樂がそう言つと、最上階へと走って行った。

神威（後書き）

多分次は神威VS神楽&新八&月詠&さっちゃん
の戦いになるかも・
なっ
たらいいな・・

神威VS

土方たちが行ったのを見届けた後、神楽たちは各々の武器を構えた。それを見た神威が笑いながら、傘を神楽たちの方に構えた。

一瞬の珍黙。

それを破ったのは神楽だった。

「うおおおおー!!」

走りながら傘を神威に向け、火を噴かせ、それに続き

月詠、さつちゃん、クナイや手裏剣を神威に一斉放射させた。

それに神威は

「戦い方は良いけど、弱い奴には興味無いんだよ。」

煙が立ち込めている中、片手で全てを止め、もう片方の手で、走って来た神楽の首を掴んだ

「ゴホッゴホッ・・・カハッ・・・!」

「神楽ちゃん!」

「やるわね・・・」

「チッ・・・」

神威は笑いながら、実の妹であるはずの神楽の首を掴んだままで、神楽は暴れながら、苦しんでいた。

それに神威は

「煩いなあ。殺しちゃうぞ？」

グサアア！

神威は何が起きているのか分からなかった。

新八は、神威の腹を刺していた。

「っ・・・！」

「しん・・・ぱち・・・！」

「神楽ちゃんを・・・！はなせえええ！！！」

新八は刀を抜くとまた、神威を刺した。

ズバッ！

グサアア！

「っ！！！！（この眼鏡の何処からこんな力が・・・?!）」

新八は怒りで己を忘れ、思うがままに神威を刺した。

腹を、胸を肩を。

それを繰り返していたら、

バタッ

神威は倒れ、神楽は神威の手から解放された。

その時、新八は我に帰り、神楽の元へ行つた

「ゴホッ・・・ゴホッ」

「神楽ちゃん！大丈夫？」

新八は頬に付いた血を拭きながら言った。

それに神楽が

「新八いお前に血はあわないネ・・・」

その時神威が、

「今日のところは此処までにしてといてあげるよ。でも油断していたらまた来るよ？」

そついうと、どこか行ってしまった。

月詠は神威が行ったのを見届けると

「わっちらも急ぐでありんす！」

そういつと、最上階へ向かって行った。

走りながら食べるのって大変だよね。
(前書き)

この章はギャグです
ギャグあんま無いな。
この小説

走りながら食べるのって大変だよね。

神楽たちが戦っているその頃、

土方たちは最上階へと走っていたが、何せ遠く、エレベータも使えないので、大変だった。
流石の桂でも、疲れていた。

だが、山崎だけはまだ疲れていないらしい。

山崎が、土方にあとどれ位か聞こうとした時、奇妙な音が聞こえた

チュルル・・・チュルル

「副長おおお！！何食ってんですか？！」

「何ってマヨネーズを食ってる
食べるか？」

と言って、土方はマヨネーズを食べながら、マヨネーズのボトルをもう一本取り出してきた。

それを見た高杉が

「なんでマヨネーズが飯なんだあ？」

「美味いから」

それに沖田が

「ひひはふあふあん、ふあんへふおんふおふっふえんふえふふあい
！（土方さん、何てもん食ってんですかい！）」

激辛せんべいを食べていた。

バリツバリバリツ

「何ふえいふあふえふいふあふあふえんふえい何ふえふふあ! ?」
何で今激辛せんべいなんです
か?!」

山崎は、真選組ソーセージを食べながら言った。

それに桂が

「って貴様も今現在進行形で何か食べているではないか?!」

サクサク・・・

桂はんまい棒を食べていた。

高杉は、そんな様子を見て

「女あこいつらはいつもこんな感じなのかあ・・・って何食ってんだあ?」

お妙は高杉に

「食べます？バーゲンダッシュ」

それを見た高杉はこう思った。

「（何も食べていないのは俺だけなのか・・・あの眼鏡にツッコミ
教えてもらおうか・・・）」

高杉は、土方、沖田、山崎、桂、お妙を置いて、先に進んだ。

走りながら食べるのって大変だよね。
(後書き)

アクセス解析見たら、凄かった…
感想、レビュー待ってます！

約束（前編）（前書き）

この章から思いっきりシリアス全開です！

約束（前編）

高杉は、やっとの事で最上階に着き、後から土方、沖田、桂、山崎、お妙がやって来た。

その時だった。管制室から斗卿の声が響いた。

「よく此処までこれましたねえ。でももう終わりですよ。貴方達は此処で死んでいくのですから。」

それに、高杉が

「俺達は死なねえぜ。銀時を助け出して黒夜叉を倒すまでは絶対死なねえ。」

斗卿を睨みながら言った。

斗卿は、薄く笑いながら

「クフフツ・・・本当に出来るのですかねえ。白夜叉はもう貴方達のことを忘れているのですよ？それでも連れて行くとは無謀なことなんですよ。白夜叉は、もう人斬り人形・・・」

ガキンッ！

「あいつと約束したんだよ・・・！仲間を護るってなあ・・・！！」

それを見た斗卿は

「だから無駄って言っているのが分からないのですか？」

そついうと、斗卿は土方の前からいなくなった。

「なっ……！消えた！」

土方は周りを見渡していた。

その時山崎が

「副長！上です！」

「上？」

土方は山崎の言つとおり上を見ると

「なっ……！」

斗卿は、宙に浮いていた

「私の武器は剣だけじゃないのですよ。甘く見ないでください」

その時だった。

「土方さん！ワイヤーです！」

新八たちがやって来て突然新八が叫んだ。

それに、沖田が聞いた

「なんでそんなことがわかるのですかい？」

それに月詠が冷静に

「前にも同じようなことがあったのじゃ。その時宙に浮いている時に使われていたのがワイヤーだったのじゃ。」

月詠の言葉を聞いていた斗卿が

「お見事ですなえ。でももう遅いですよ。」

斗卿は土方に向けてクナイを投げた。

しかし、速すぎて防ぐにも防げなかったが、月詠、全蔵、さっちゃんたちが投げたクナイで防ぎ、その間に土方もワイヤーを見つけ出しワイヤーの上に乗った。

それに、斗卿が

「悪くないですねえ。でも防ぎきれませんでしたよ！」

その時、土方の頬や腕や足から血が流れた。

「なっ……！」

斗卿が薄く笑いながら

「さっきのクナイにワイヤーをつけておいたのですよ。」

そう

斗卿はクナイにワイヤーを付けておき、それを投げたのだった。

その時

「やああああー!!」

山崎と沖田が斗卿の背後を狙い斬ろうとしたが

「そんな事したって無駄ですよ…!」

斗卿は山崎と沖田の顔を爪を立てながら手で掴んだ

山崎と沖田は苦しもがいていた

斗卿はニヤツと気味悪く笑いながら

「私を斬るなんざ百年早いわああ!」

そういうと、山崎と沖田を冷たい床に叩きつけた。

山崎と沖田の顔からは血が滴りうつすらと涙を流し気を失っていた。

「ザキ!総悟!」

土方は山崎と沖田を見てから瞳孔全開の目で斗卿を睨んだ

それをものともせず斗卿が冷たく言い放った

「なんでしょうか？私は言ったことをしただけです。」

その時

髪は長くなり

死んだ目ではなく

とても冷たい目をし

白装束を着た

銀時が

殺気を出しながら

無表情でやって来た。

約束（中篇）（前書き）

明けましておめでとつございますっ！！

約束（中篇）

「白夜叉・・・！」

桂が驚きを隠せないで居た

その時、斗卿が

「白夜叉！そいつらをやりなさい！」

銀時は、コクンと頷くと、

土方たちの方に向かってきた。

ゆつくりと。

銀時の先には、

神楽が居た。

「神楽ちゃん！」

「銀ちゃん・・・！？」

神楽は動けなかった。

いや、動きたくても、動けなかったのである。

銀時の殺気で。

しかし、銀時は無表情で何も言わずに

刀を振り上げた。

その瞬間、

「止めろ！万事屋あああ！！！！」

神楽と銀時の間に、

土方が割り込んだ。

「マヨ・・・！」

ガキイイン！

刀の擦れる音がターミナルの中に響いた。

「万事屋あああ！！！！目を醒ませえええええ！！！」

土方は、銀時のかたなを押し返しながら、必死に言った。

一瞬銀時の顔が少し歪んだが、また元に戻り、

再び刀を振り上げたと思いきやすぐに、振り下ろした

「（やられるっ！！！！）」

土方は反射的に目を閉じた。

しかし、一向に振り下ろされなかった。

土方は、恐る恐る目を開けた。

「うあああああ！」

「銀さん、元に戻ってください！また三人で万事屋をしましょうよ！」

「銀ちゃん元に戻るヨロシ！銀ちゃんの敵は私たちじゃないネ！」

そこには、銀時が暴れて、それを止めている新八と神楽が居た。

それによって、

銀時の動きは止まったかと思われたが、また暴れだし、神楽と新八を壁に叩き付けた。

「ガッ！」

「ゴフッ！」

その様子を見た桂と高杉は

「高杉、あいつ、全然意識が無いぞ。行くぞ」

「わかったぜ。」

そういうと、二人は銀時に斬りかかった。

銀時は意図も簡単にかわし、

とてつもない速さで高杉と桂を斬った。

「桂さん！高杉さん！」

新八は、咳き込みながらも叫んだ。

その時、

「新八、神楽、ヅラ・・・？高杉・・・？」

約束（中篇）（後書き）

何とか、自我を取り戻した銀時、だが悲劇は続く・・・

約束（後編）

其処には、いつもの銀時がいた。

しかし

「ヅラ、高杉・・・それは俺がやったのか？」

銀時は桂と高杉の傷を目を見開き見つめながら、震える声で聞いた。

それに桂と高杉が

「大丈夫だぜえ」

「銀時、大丈夫だ。心配ない。」

そういったが少し顔をゆがめた。

銀時は血が滴る刀を見た。

銀時は、泣きながら謝った。

「皆・・・ごめん・・・」

また護れなかった。逆に傷つけてしまった・・・」

それに、神楽が

「でも・・・でも！銀ちゃんが戻ってくれただけでも嬉しいネ！」

それに続き、月詠が

「とても心配しておったのだぞ。」

それに、銀時が泣き笑いの顔をして

「ありがとうな」

それを見ていた斗卿は

「そんな・・・そんな馬鹿な！！黑夜叉様は強力な薬を打ったと言っていたのに・・・！！」

頭を抱えていた。

チャキ

「これで分かりましたか？」

「俺達は仲間がいる限り、不可能を可能に変えることが出来るんですぜい？」

意識を取り戻した山崎と沖田が、斗卿の首に刀を添えた

その時

「ゴホッ！ガハゴホッ・・・！」

銀時は咳き込み、

胸を押さえながらしゃがんだ。

「「「銀さん！」「」」

「「「銀時！」「」」

「銀ちゃん！」

「万事屋！」

「「旦那！」「」」

全員、銀時に駆け寄った。

「新八・・・神楽・・・沖田君・・・ザキ・・・土方君・・・ツラ・・・

高杉・・・お妙・・・さっちゃん・・・月詠・・・皆ごめんな。」

「銀さん・・・！戻ってくれたんですね！」

新八は、涙をこぼしながらも言った。

「銀ちゃん、もう何処にも行っちゃだめアルよ？」

神楽は泣くのを堪えながら銀時に抱きつきながら言った。

そんな神楽と新八の頭を優しく撫でた

「冷や冷やしたぞ。」

「全く・・・心配かけやがって」

「すまねえなあ」

「俺達の憎むべき奴を殺りにいこつぜ。」

「ああ！」

その時、

ザシュウッ！

傷

新八たちの目に映ったのは

自分たちを護るため

前にでて

斬られた

銀時だった。

それを見た斗卿が

「ほおおら！ やっぱり貴方達には守れなかった！！
約束とやらを！」

銀時は、ゆつくりと冷たい床に倒れた。

「銀ちゃん!!!!」

「「「銀時!!」」」

「「「銀さん!!」」」

「「「旦那!!」」」

「万事屋!!」

銀時の周りに全員が駆け寄った。

銀時の肩から背中にかけて、止まることも無く血が吹き出していた。

「銀ちゃん!また・・・三人で万事屋やろうネ?だから起きるアル!!」

神楽は涙を流しながら、銀時に話しかけた。

「旦那あ!まだ借りを返していやせんのに死んでいたら困りますぜい!

だから旦那起きてください!」

沖田も神楽同様泣いていた。

その時

「ふつ、所詮白夜叉か・・・」

斗卿があざ笑うように言った。

それを聞いた神楽が

「よくも・・・よくも銀ちゃんをやってくれたアルな！」

それに斗卿が

「なんだ、約束を護れなかった奴がそんな大口叩けるのか」

「今度こそ・・・今度こそ銀ちゃんを護る！！」

「私たちの手で！」

「僕たちの手で！」

そういうと、神楽と新八は斗卿に向かっていった。

『うおおおお！！！！』

しかし、

ドゴオオオン！！

斗卿は、新八と神楽を弾き飛ばし、神楽にクナイを投げつけた

だが、

「・・・っ！！」

新八がその間に割り込み新八の肩にクナイが刺さりうずくまった。

「新八！！」

それを見た斗卿が

「ふっ！雑魚共が寄ってたかって私に齒向かっても痛くも痒くも無いわ！」

そういいながら、

新八の首を掴んでいた。

「うがぁぁ！」

新八は暴れていた。

「雑魚は雑魚らしく指を啜えて見ていな！」

そういうと、

斗卿は新八の腹を蹴った。

ドサァア！

新八はぐったりとしていた。

ドクンッ

ドクンッ！！

神樂が顔を伏せたと思ったら再び顔を上げた。

そこには、

大きな目から、涙を流し

口元は狂った人形のように笑っていた。

皆、神樂の様子に啞然としていた。

斗卿は神樂を見て

「仲間がやられて、抑えていた夜兎の本望が抑えきれなくなっ
てしま・・・」

ドガアアアン！！！！

神樂は、斗卿が言い終わらないうちに蹴り飛ばし、勢いよく壁に叩
きつけられた。

「フフフフ・・・フフフフ」

「最初から本気でやればあなたの仲間もやらねずに済みましたの
にねえ」

斗卿は笑いながら言った。

しかし、神樂は何も言わずに、次々と攻撃をしていた。

「これが・・・夜兔の戦い方・・・」

山崎が、つぶやくように言った。

夜兎の本望

その時、神楽と斗卿の戦いに見入っていた土方が

「山崎！急いで眼鏡の応急手当をしろ！」

「はい！」

山崎は新八の元へ駆け寄った。

「新八君！大丈夫？」

新八はうつすらと目を開けた

「僕は大丈夫、です・・・今、神楽ちゃんに、意識が無い・・・」

新八の言葉をさえぎり山崎が

「もう喋らなくていいから！今はじっとしていて！」

そういうと、新八は目を閉じた。

「チャイナあああ！聞えていやすかしいい！！！」

いきなり、沖田が叫んだ。

それに土方が驚き

「お前何してんだ?!」

土方の問いに沖田が、

「あんなチャイナを見たくないんですあ！それにあれ以上やらなくてもいいでしょう？」

土方を見ると、

神楽は

不気味に笑い、

きれいな青色の目からは大粒の涙

体が拒絶しているのに

止まることができなかった。

オレンジの髪や服には

斗卿の血がついたままで

斗卿を床や壁に叩きつけ

斗卿はもう肉塊と化していた。

もう、そこにはいつもの神楽ではなく、

止まりたくても止まらない

夜兎の本望に翻弄された

悲しい獣となっていた。

土方は横にいるはずの沖田を見ようとしたが沖田がいなかった。

その時

「おい！あの餓鬼何やってんだ！？」

高杉が驚きを隠せないような声を上げた。

それに土方が反応し

「なにがあつたんだ？！」

すると高杉が

「あれお前らのところの餓鬼だろ？」

「リーダーを止める気か?!」

高杉と桂が言っていたのは沖田のことだった。

沖田は暴れ続けている神楽にそつと近づき押さえつけた。

「落ち着けチャイナ!」

神楽はジタバタと暴れもがいていた。

「うう!ぐっ!」

神楽は抱きついてきた沖田の腕に噛み付いた。

沖田の腕からは血が流れ滴っていた。

「っ……!」

しかし、沖田は神楽を離さず声を掛けた。

「戻れえええええ!!!!!! 神楽ああああ!!!!!!」

「サ……ド?」

「なんでい」

「ありが……とねっ」

神楽は泣いていた。

沖田はいきなり神楽に抱きしめた。

それに神楽が驚きながら

「サドやめるヨロシ！」

「何とでも言いなせい！」

沖田の耳はリンゴのように真っ赤になっていた。

黒夜叉

その時、

カツン・・・カツン・・・

「白夜叉が自我を取り戻すとは計算外でしたねえ」

その言葉の主の方に土方たちは振り向いた。

そこには黒夜叉がいた。

「黒夜叉・・・！」

桂と高杉は殺気をかもし出していた。

黒夜叉は銀時の元へ行こうとした。

だが

「万事屋の元へは行かせねえ・・・！！」

「何があっても旦那を護りまさあ・・・！！」

沖田と土方は黒夜叉の前に立った。

それに続き、桂、高杉、神楽、意識を取り戻した新八、山崎、月詠、さっちゃんそしてお妙が居た。

それをみた黒夜叉が

「質問だ」

「何アルか・・・?!」

神楽が聞いた。

黒夜叉はニヤリと笑いながら言った。

「また、

その童わらわが

覚醒したら

どうする?」

土方たちが振り返ったときには

時すでに遅し。

プスッ

黑夜叉は

銀時の

首筋に

一本の注射器を刺した。

ドクンッ！

銀時はゆっくりと立ち上がった。

「銀さん・・・」

普通なら動けない傷なのに銀時は動いていた。

一歩一歩かみしめるように土方たちにゆっくりと向かってきた。
物凄い殺気と冷たく光る紅の目で誰一人動けなかった

「クスクスクス・・・」

「笑ってるじゃねえか・・・」

高杉がつぶやくように言った。

皆、絶句していた。

サア、スベテヲコワストキガキタ

狂った笑い

黒夜叉が叫んだ。

「殺れ！白夜叉！」

黒夜叉の一言で銀時は狂ったように笑った。

土方たちはたじろいだ。

黒夜叉は不気味笑いながら

「さっきの薬はなあ

人の心を狂わせて

殺す薬なんだよ

もう白夜又は死ぬんだよ。

一人でな。」

「一人で、だと？」

「あいつぁ死なせねえぜ」

桂と高杉の言葉に土方たちも便乗した

「万事屋はこんな事で死ぬような奴じゃねえんだよ！」

「銀ちゃんには私たちが居るネ！」

「僕たちがいる限り銀さんは死なない！」

『僕たち／俺たち／私たち／わっちらの仲間だから！』

そついうと、高杉が懷から、一本の注射器を出した

「なっ・・・！それは！」

「銀時を助ける為の薬だぜえ」

黒夜又は驚いていたが冷静になり

「ふふっ！それを刺してももう無駄だ。やるんならやってみな」

そついい捨てると黒夜叉は闇の中へと消えていった。

「待て！黒夜叉！」

高杉が黒夜叉に近づこうとしたとき

「危ねえ！高杉いいい！！！」

「っ・・・！！」

ドゴオオオオン！！！！

「クスクスクス……」

銀時は高杉を斬ろうとしていた。
物凄い速さで斬ろうとしていた。
背中から血を滴らせながら。
狂った笑いをしながら。

高杉はギリギリのところで避けた
後一秒遅かったら斬られていてもおかしくない位だった。

銀時は再び刀を振り上げた。

「高杉さん!!」

お妙が叫び、高杉はまたもや間一髪で避けたが

このままじゃ、高杉の体力が持たず、

銀時の命も危ぶまれた

それなのに

ドゴォオン!!

ドゴオオン!!

ドゴオオン!!

「あははは! はははっ!!」

銀時は刀を振り上げては振り下げ、高杉が間一髪で避けていた。

「ちっ・・・このままじゃ埒があかねえ・・・」

土方の呟きにさっちゃんが

「一斉に銀さんにかかるってのは・・・どうかしら」

それに土方が

「そうだな・・・」

さっちゃんと土方の言葉を聞いていた桂が

「早くこの薬を打たんと相当危険だからな。」

「じゃあ、やりやすい」

沖田の言葉に皆が頷いた。

「万事屋あああ!!」

「銀時いいいい!!!!」

最初に、高杉と土方が銀時に軽く斬りかかった。

しかし、銀時は二人を二倍以上の力で弾き飛ばした。

次に桂と新八が斬りかかり、

月詠とさっちゃんの二人がクナイを投げた。

「銀さん戻ってください!!」

「戻れ銀時いい!!!!」

銀時はクナイを弾き飛ばすと、二人をまたもや二倍以上の力で弾き飛ばすと

刀を振り上げた

それに、

神楽とお妙が仲間の危機を察して、銀時を殴った。

その時、

「神楽・・・お妙・・・俺を・・・俺をそのまま殺してくれ・・・」

『?!』

銀時はそのまま倒れた。

銀時のまわりに皆が駆け寄った。

狂った笑い（後書き）

次ぐらいで終わっちゃうかも・・・

叫び

「「銀さん!!」」

「「銀時!!」」

「「旦那!!」」

「万事屋!!」

「土方君・・・」

沖田君・・・

ザキ・・・

さっちゃん・・・

月詠・・・

高杉・・・

ヅラ・・・

新八・・・

神楽・・・

お妙・・・

ごめん・・・」

銀時は掠れた声で、でもしっかりとした声で言った。

それに、新八が

「銀さん謝らないでくださいよ・・・
銀さんらしくないじゃないですか」

「そうネ！！銀ちゃんらしくないアル！」

「おまえらなあっ・・・ゴホッ！・・・ガハッ！」

銀時は激しく咳き込み、血を吐いた。

「銀ちゃん！！」

神楽が悲しそうに言った。

「ハア・・・ハア・・・ウッ・・・！ゴホッ！」

銀時は苦しそうに暴れ、さっきより大量の血を吐いた

それに、高杉が珍しく焦り

「ヅラア！薬を！」

しかし、桂が

「やりたいのは山々だがこんなに暴れていたら危ない・・・」

焦りながらも冷静に言った。

しかし、その時、

「っ・・・」

銀時の意識が完全に無くなった。

「銀ちゃん？ねえ嘘でしょ？銀ちゃん！起きるヨロシ！」

神楽は泣きながら言った。

それに続き、新八たちが泣き叫んだ。

「銀さんっ・・・また・・・三人で万事屋するんでしょう？銀さん！」

「旦那あ！！起きてくだせえ！！旦那あ！！」

「おい！万事屋！狸寝入り乞いてるだけだろ？なあ！起きろよ！！」

「銀さん！まだ借りを返してないのに・・・お願いだから起きてください！」

「旦那！まだ借り返してないんですから起きてくださいよ！旦那あ！！」

「銀時い！目を覚ませよ！！」

「またSMプレイしてよ！銀さん！」

「銀時！起きるでありんす！！」

各々銀時の名を叫び泣いていた。

その時、新八が

「桂さん・・・一か八かで・・・試してみましようよ・・・まだ間

に合うかも知れないでしょ？」

涙を流しながら言った。

それに、桂が

「そうだな・・・」

桂は注射器をゆっくりと出し、

銀時の首筋に差した。

生と死 究極の選択肢（前書き）

銀時 SIDE です

生と死 究極の選択肢

ここは・・・何処だ？

そうか・・・俺は死んだのか・・・

その時

「銀時ではありませんか」

其処には松陽先生が居た。

「先生？」

松陽先生は優しく俺に聞いた

「何で此処にいるのですか？」

俺は、さっきまでのことを全て話した。

俺の話を聞いていた、松陽先生は

「銀時、また戻りたいと思いませんか？」

それに、俺はびっくりした。

「え？またあいつらと居れるって事か？」

それに、松陽先生が

「ええ。それとも嫌なんですか？」

嫌なわけないだろ・・・

あいつらとまた馬鹿やってわらってられるなら・・・

俺の答えは一つだった。

「嫌なわけねえだろ。あいつらは俺の大切な仲間だからな。」

すると、松陽先生は

「そうですね。そんなに意思が強いのなら戻れるでしょう。」

優しく笑いながら言った。

「それでは銀時、目を閉じて、大切な仲間の顔を思い浮かべてください。そうすれば戻れます」

「先生・・・ありがとうございます」

「行きなさい」

「はい！」

俺は、そう言つと、

目を閉じ、大切な仲間たちの顔を思い浮かべながら意識を手放した。

生

プ
ス
ッ

桂は、銀時の首筋に注射器を刺した。

皆、見守っていた。

だ
が

戻らなかった。

一気に、力が抜けたような気がした。

「何で……どうして銀さんが……銀さんがああ!!」

新八は何かが取れたように、泣き叫んだ。

銀時の名を叫んでも、戻らなかった。

「銀さん……起きてくださいよ……」

新八の涙が、銀時の肩に落ちた

その瞬間

「つ……」

銀時の

「「銀さん！」」

目が開いた。

「万事屋！」

「旦那！」

「銀ちゃん！」

「銀時！」

その後（前書き）

新八SIDEです

その後

銀さんは、傷がひどく多く、知らぬ間に肋骨も折っていたらしく、一ヶ月ほど病院で入院していました。

また、戦場と化した、ターミナルはまた立て直される事になったらしいです。

神楽ちゃんや沖田さんたちも全ての怪我が治り、

神楽ちゃんと沖田さんは最近よく一緒に出かけるようになった。

そうそう、真選組は桂さんと高杉さんの追跡、及び指名手配するのを止めて、今は黑夜叉を指名手配するようになった。

月詠さんは吉原で元気に働き、さっちゃんさんは銀さんのストーカーを懲りずにがんばっている。

姉上も元気に近藤さんを蹴散らしている・・・

あと、変わった事と言えば

土方さんがよく甘いものを持つてくるようになったのと、桂さんと高杉さんが、攘夷活動を止めたこと。

前、家はどのようなのか聞くと万事屋で寝泊りするとか言ってた・・・

どうなる事やら・・・

僕はそんな事より、また銀さんが誰かに、薬を打たれ僕たちの敵になってしまうことが気がかりだった。

でも、僕は何があっても、銀さんを助けたいと思う。

大切な・・・大切な仲間だから

後書き

皆さんこんにちはー！！

やっと終わった・・・

本当大変だった・・・

途中で止めようと思ったたりしたんですけど皆さんの応援で何とか続けることが出来ました。

ありがとうございます！

鬼殺しの続編は作らせていただきます！

ギャグになるかどうかは分からないけどね（笑）

それでは続編のあらすじ！！

「あなたが、清葉亮堵さんか？斗卿に頼まれてきた。」

「ああ。黑夜叉だな。」

「主の頼みは分かっている。」

「屍を喰らう鬼を殺れ。だろ？」

「そうだ。最悪な状態にまでに陥れてな。」

あの事件が終わってから2年、銀時たちはいつものように楽しく暮らしていたが、ある時に銀時に異変が！

銀時たちはどうなる？！

ってやりたいんですけど・・・

その前に！

番外編を作りたいです！！

高杉と桂の家探しとか、神楽と沖田のお出かけとか・・・

まあがんばります！！（でもキャラ崩壊するけど・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8384o/>

鬼殺し

2011年1月2日22時27分発行